

臨床レポート

漢方治療に鍼灸を加えて奏効した不妊治療の1例

愛知県半田市 住吉堂漢方ラウンジ／住吉堂鍼灸院

榊原 哲

【諸言】

「漢方薬と鍼灸の併用について」を本誌66号(2015)にて臨床レポートとして報告し、その相乗効果について考察した。今回は長年、漢方薬にて体質改善を目的に治療している女性で結婚を機に妊娠を希望され、漢方治療を続けていく中で、鍼灸治療を加えることで妊娠・出産に至った症例を提示し、考察を加えて報告する。

【症例】

患者：35歳 女性

主訴：妊娠希望

既往歴：特記事項なし

現病歴：199X年12月初診。29歳の頃より当店に来店して漢方相談を希望された。当初より月経不順、頭痛、冷えのぼせ、便秘、疲労感等、多彩な愁訴があった。病態を上熱下寒、下焦湿熱、血瘀ととらえ、治療を開始した。理気剤、活血化瘀剤などを組み合わせて、いろいろな角度より試行錯誤しながら治療をしていった。199X+3年6月より、猪苓湯エキス細粒(松浦薬業)2g+桂枝茯苓丸加薏苡仁エキス細粒(松浦薬業)2gを朝1回と、防風通聖散エキス細粒(松浦薬業)2g+桂枝茯苓丸加薏苡仁エキス細粒(松浦薬業)2gを夕1回の服用にしてから、全体的な愁訴が改善されて落ち着き始めた。199X+5年8月には月経周期も順調になった。

現症：199X+6年2月より妊娠を希望されたため、瀉下剤、活血剤の配合の見直しを含め、処方の変更を行うこととした。

望診：顔色はやや紅(のぼせ感はある)

舌診：胖大舌、淡紅舌、白膩苔(+++)、

齒痕、舌下静脈瘀滞(±)

脈診：浮・数・滑、尺脈：弱

弁証：上熱下寒、中焦湿蘊、血瘀

治法：温中散寒、理気化湿、補血活血

処方：五積散エキス細粒(松浦薬業)4g分2+荊芥連翹湯エキス細粒(松浦薬業)4g分2

経過：上記処方にて月経周期は安定維持できているものの、基礎体温表では低温期が長く、高温期への移行、維持ができないことが多い状態が続いた。そのため、199X+6年4月より、漢方薬の周期療法を取り入れることにし、月経周期を月経期、卵胞期、排卵期、黄体期の4期に分けて、それぞれの周期に合わせた漢方薬を処方した。基本処方を五積散として、月経期には桂枝茯苓丸加薏苡仁、卵胞期には当帰芍薬散、排卵期には加味逍遙散、黄体期には杞菊地黄丸を併用した。

199X+7年1月からは温補腎陽と黄体期の持続を期待して、杞菊地黄丸から八味地黄丸へ処方を変更した。この八味地黄丸での温陽が奏効し、患者本人も身体の温かさを実感できたと話された。

鍼灸治療については、周期療法と同じく199X+6年4月より開始した。当初は内関、公孫、太衝に10分間置鍼し、三陰交、太溪、照海に施灸した。鍼はステンレス鍼(NEO：山正)0.16mm×30mmを使用して直刺にて深さ7mmとし、灸は間接灸(長安マイルド：山正)を使用した。

199X+7年3月からは鍼治療を中断して灸治療のみの治療に変更した。配穴は合谷、中脘、天枢、氣海、子宮、神闕、足三里、三陰交、太溪、照海、太衝、腎兪、次髎、十七椎



とした。

199X + 7年5月に産婦人科にて妊娠5週目と診断された。以後、漢方薬の服用は中止して、灸治療のみ7～10日に1度のペースで継続した。

199X + 7年12月、無事に女兒を出産し、母子ともに健康と連絡をいただいた。

【考察】

今回は、妊娠を希望される以前より体調管理のために漢方相談を希望して来店され、約7年間の漢方治療を実施してきた症例で、当初、素体は湿熱タイプであり、病態としては湿蘊と血瘀による多彩な愁訴を呈していた。

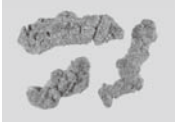
その対処として、漢方治療では試行錯誤はあったものの、裏実熱を目標に清熱解毒利水の防風通聖散、水熱互結（湿熱）を目標に清熱利湿の猪苓湯、さらに下焦血瘀を目標に活血化瘀薬の桂枝茯苓丸加薏苡仁の3処方的配合して治療を行った。その結果、身体全体の気血津液の流れを順調にすることができたので、その上で不妊治療を開始した。本症例の不妊治療における漢方薬選択の注意として、清熱剤と瀉下剤の使用により、薬性が寒性に偏りすぎないようにすることを考え、処方には五積散+荊芥連翹湯とした。五積散は「五つの積、すなわち集積停滞しているものを消散させる」という意味で、気、血、痰、寒、食の停滞を除く処方である。荊芥連翹湯は温清飲が基本の処方で、四物湯の部分は補血活血を補強し、黄連解毒湯の部分と柴胡・薄荷・連翹は上熱下寒の清熱に対応できると考え、また、桔梗・枳実・白芷は理気を補強してくれることを期待しての配合とした。長年の漢方治療により、月経周期は安定したものの、基礎体温表では低温期と高温期のバランスの悪さが目立つため、漢方薬による周期療法を取り入れることとした。周期療法とは月経か

ら次の月経までの期間を1周期とし、さらに1周期を月経期・卵胞期・排卵期・黄体期の4期に分けて、それぞれの時期に合わせた処方を服用する治療方法である。本症例では、基本処方を五積散とし、月経期には活血化瘀を目的に桂枝茯苓丸加薏苡仁、卵胞期には補血利水と卵胞の発育を目的に当帰芍薬散、排卵期には疏肝理気と高温期へのスムーズな移行を目的に加味逍遙散、黄体期には補腎益精と黄体期維持を目的に杞菊地黄丸を併用した。

周期療法にて徐々にメリハリがついてきたようで、基礎体温の推移も低温期と高温期の二相に分かれるようになってきた。しかし、高温期の維持が継続できずに月経を迎えることが多かったため、温陽をバックアップできるようにと考え、杞菊地黄丸を八味地黄丸に変更した。さらに鍼灸治療から灸治療のみに変更して外面からも温陽を支えることにした。灸治療のみにした理由は、温陽を強めなかったことや患者がとくに施灸を希望されたためである。

灸治療の配穴は、全身の気の巡りを重視して合谷、足三里、太衝とし、中焦から下焦部位と子宮部位の温陽を意識して中脘、気海、天枢、神闕、子宮、次髎、十七椎とし、さらに補血と補腎の意味で三陰交、照海、太谿、腎兪とした。

その結果、漢方治療と灸治療の併用へと変更後、2ヶ月目にして妊娠が確認された。これは長年の漢方治療にて月経周期が整い、さらに周期療法にて月経内容にメリハリができて、八味地黄丸と灸治療で温陽を強めることができた結果、高温期の維持ができて妊娠に至ったと考えられた。



臨床レポート

【結語】

今回の症例は、漢方治療のみでは温陽が力不足の印象があり、灸治療を組み合わせることで、経絡に温陽を直接送り込むことができた結果と考えている。また、妊娠後も出産まで灸治療を継続したことも、妊娠を順調に維持できた要因と考えている。

〈参考文献〉

- 1) 仙頭正四郎; 読体術: 自分でできる東洋医学の健康診断, 小学館 (1998)
- 2) 仙頭正四郎; 標準東洋医学, 金原出版 (2006)
- 3) 中医臨床, 34 (2), (2013)
- 4) 曾慶琪 主編; 不孕不育症中医治療, 江蘇科学技術出版社 (2003)
- 5) 伊藤良・山本巖 監修, 神戸中医学研究会 編; 中医処方解説, 医歯薬出版 (1982)
- 6) 三浦於菟; 実践漢薬学, 医歯薬出版 (2004)
- 7) 山西医学院 李丁・天津中医薬大学 編, 浅川要 他訳; 鍼灸経穴辞典, 東洋学術出版社 (1986)
- 8) 高金亮 監修, 劉桂平・孟静岩 主編, 中医基本用語辞典翻訳委員会 訳; 中医基本用語辞典, 東洋学術出版社 (2006)